

中村武羅夫

國木田獨步氏



國木田獨步氏



自分は未だ國木田獨歩氏に、面と向つて——二人相對して語つたことは無い。唯、或る人の所で、その或る人と對談して居られるのを、傍で些つと聞いたばかり、固より正式の對面と云ふことは出来ないが、それでも、とにかく初對面は初對面である。で、茲には其時自分の國木田獨歩氏に依つて得た感じを記して見る。

一目見て自分は獨歩氏の人物とその作品が一致して居るのに驚いた。獨歩氏の作品は、どれも短かいキビキビ

した、生気の溢れた、少しのだけ、気味も無いものばかり。人物もその作品と同じように、小さいが然し能く整ってキチンとした、一分の隙もない締りのある態度で、其時は洋服であったが、身体にキツシリ合って、身内にはその溢れるような生気が、破れるまでに緊張して居る。声にも身のこなしにも才気がほとばしって、丈こそ低いながら、身体こそ小さいが、その小さい身内には、才気が満ち充ちて小気味が好い。言語も態度もハツキリしたもので、少しモジモジすると、それがまだるくつて堪らないと云った風だ。そして、始終その眼をせかせかと働かせられ

る。一分だって休んで居る時は無い。

気の短かい癩癩持ちの、少し気に入らんことがあると、口で云うよりは先ずさき、手が飛ぶと云ったような気性で、恰度砥ぎたての、刃尖のバリバリした光ったナイフのような気性だ。触れると切れそうなので、触れるのも恐ろしいくらいである。

そして、人を見るのに、その相手を嘲むような、冷笑するような、冷たい皮肉なところがある。近寄って行つたところが頭で跳ね返されそうだ。その性質は極端から極端に走って、とても中庸などの保てる人ではないらし

い。総べての人を味方で無ければ、敵とすると云った方の人らしい。で、真に親しくなれば手と手を握って泣くことも出来よう、互いの胸と胸と相触れて、二人の血管を通じて、血を通わすことも出来ようが、それでなかつたら普通一遍の友となることは出来まい。心を割る友でなければ、後は皆他人であろう。







日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---

日本文学電子図書館